

THE PRACTICE OF THE  
PRESENCE OF GOD

BROTHER LAWRENCE

東京基督教書類會社

神と偕なる靈的生涯

ジェー・ハインド譯

253

106

特

No. 151

第一十五百第

020328-000-3

特65-399

神と偕なる靈的生涯

ジェー・ハインド/著

M39

ABI-0134



引

此の小冊子は、  
 七たる者であるの、  
 素より何等の教育を受け  
 んで身を軍籍に投じたが、  
 於て既足カシメカ派の寺院に入り修道怠りなく、後に

此の小冊子は



ハーマンの言行及び書簡を編纂

は佛國ローレーンの貧家に生

其の後千六百六十六年パリに

はブラザー、ローレンスとして名を知らるゝやうになつ

た。

彼の悔改めたのは丁度十八歳の時で、或る冬の日葉の

3.9 4 12  
 内交

凋落して終つた樹木を見て之がまた來春になれば新緑を呈  
すること、に想及ぼし、深く神の攝理の靈妙なることに感  
動したが、其の時から彼は心中著しく神を知り神を愛  
するの觀念に富んで來て、確く神の實在を信じ其の聖前  
を離れんやう心を碎き、全く一身を神に捧げて聖き生涯  
を送り、八十歳の高齡に達し遂に永遠の安息に就いたの  
である。

彼の信仰は極めて單純であつて、嘗て何等神學上、教理  
上の難問などに苦慮したことなく、又斯る難問が更に自  
分に起り得なかつた。彼の唯一の目的は神と自己とを全

く結合せしめやうとするので、之が爲に出來得る限り捷  
徑を取らんことを努めた、彼が其の書簡の中に、「吾が之  
を味ひ之を経験して言語にも筆にも述べ盡されぬ其の美  
しき状態は、神の胸懷なりと名づけ候はん哉」とあるは  
「彼が究極の目的の達せられた時の状態である。しかも  
彼の行爲は萬人の企及し能ふ所であつて、神學上の修養  
も見解も、宏壯の會堂も、將た煩雜の儀式も聖き生涯に  
必要のものでない、唯彼の如く神の實在を信じ謙遜して  
其の聖前に跪けば、厨房に於けるも講壇に於けるも神  
と交るに敢て差支はない理である。

靈 的 生 涯

本書の嘗て英米兩國にて翻刻せらるゝや、好評噴々暫時にして數版を重ねるに至り心靈界に大なる裨益を與へた是は本書の内容が恒に神と偕なる人の口唇にして始めて能く表白し得べき神の智識に満つるが爲である。余は本書がまた幸に我國に於ても斯く神の祝福を蒙り之に依て多數の人が神の榮光を讚美するに至らんことを祈るものである。

明治三十九年三月

發行者識

神 と 偕 な る

目 次

言行錄	言行第	一	一頁
言行第	三	二	六頁
言行第	四	三	六頁
書簡集		四	二頁
書簡第	一	一	三頁
書簡第	二	二	三頁
書簡第	三	三	四頁
書簡第	四	四	五頁
書簡第	五	五	五頁

目次

一

靈 的 生 涯

目次

書簡第	六
書簡第	七
書簡第	八
書簡第	九
書簡第	十
書簡第	十一
書簡第	十二
書簡第	十三
書簡第	十四
書簡第	十五

二

吉 吉 吉 吉 吉 吉 吉 吉 吉 吉

目次終

靈 的 生 涯

神と霊的生涯



予が始めて教兄ロレンス君と會見したのは、千六百

六十六年八月三日で君の談話によれば君が十八歳の時  
であつた。神は偉大なる恩寵を吾が上に下し給ふた。

それ冬季になれば草木悉く其の葉を剝取られるが、見  
る間に復一陽來復して新緑を装ひ、續いて花も咲けば實  
も生る。此の状態を熟々想ふにつれて靈妙なる神の御攝

言行 第一

一

神 と 借 と な る

理と其の御能力とについて、始めて高尚なる觀念を深くも心に會得した。此の觀念によつて此の世の束縛より解脱して、爾來四十有餘年の生涯の間に、此の上には増殖たとも曾て思はれない程に、神に對し奉る愛心を奮ひ起されたとの事である。

一體君は出納官フーバート氏の僕であつたが、性來頗るの無調法者で、器具等破損した事は敢て珍らしくなかつた。で己の無作法な事と過失とを非常に悲む餘に、遂に寺院に入て一切此の世の快樂を斷ち、一生を神に捧げる決心を起した。

靈 的 生 涯

人は間斷なく神と對話する事によつて、神の面前にあることを認識する事ができる。瑣々たる事や愚にもつかぬ事をクヨク思煩ふて、それで神との對話を廢棄て顧慮ざる如きは、實に羞耻べき至である。

人の靈魂を養ふ原動力は、神に對する高尚なる情感である、人一度此の感ある以上は、萬事を神に委ねて尙は大なる喜悅を覺ゆるものである。

信仰は活潑でなくてはいけぬ。人往々凡の行爲を信仰に基かずして、日々轉々として移易さ不要の事物を以て自己の娛樂とするのは、誠に口惜き限りではないか。そ

るな偕と神

も信仰の道は教會の精神であつて、殆ど吾儕を完全ならしむる唯一の道である。

吾儕は此の世の事にせよ心靈上の事にせよ、一切自己を神に委ね奉るべきものである。神が吾儕を導き給ふや或は苦楚を以てし給ふ事もあれば、或は慰撫を以てし給ふ事もあるが、其等の事は更に吾儕の問ふべき限りでない。眞に神に委ね奉りたる者にありては、何れも差別のあらう筈もないのだ、唯聖旨のまゝになし給へである。一体神が吾儕の神を愛する程度を試し給ふ方法は、即ち祈禱であつて、人若し祈禱中に乾燥無味退屈を感じるな

涯 生 的 靈

らば、尙一層の誠實を要するもので、此の時こそ眞に眞面目を以て神に服従せねばならぬ大切の時期である。斯様に勉むれば吾儕の心靈上に一大進歩を來す事、決して疑ふべきものでない。

ローレンス君は日々世間に傳はる所の悲惨極まる事や罪惡等を聞いても、それは格別に不思議ともしなかつたが、却て罪人が斯様な悲惨な事や罪惡を爲でかす事の出來るのが、不思議でならぬと思つて居た。君は之が爲に祈り、而して神は聖意に適は、彼等の行爲を醫し給ふ事を悟つて、君自身にも大に心を安んじたとの事である。

言行 第二  
神の要求め給ふ程度の服従に達するには、自己の靈魂  
や肉體の上に起つて來る其の慾情を慎まねばならぬ。神  
は誠心より奉仕せんと志す者に對して、此等の慾情に關  
して一道の光明を與へ給ふものである。

言行 第二

ローレンス 教兄は我慾と云ふ觀念が更になく、萬事萬  
端唯愛によつて支配せられて居た。君は神の愛を以て凡  
ての行爲の目標と決定して、此の方法を頗る満足なる方  
法とし、唯神を追求するばかりで、其の他の物は勿論神

の賜物すら殊更には求めなかつた。然ばとて神を愛する  
爲とあらば、塵一つさへ欣然と拾取る事を毫も辭まなか  
つた程である。

君は久しく自己が永遠の刑罰をうけるものとの確信を  
懷いて居て、之が爲に非常に苦悶して此の念を説破る者  
は、恐らく廣い此世界に誰一人あらうとは思つて居なか  
つたが、然るに君躬ら下の如く推斷して「予は唯神を愛  
する一念の爲に宗教的生涯を送るのだ。如何なる事も唯  
神を愛する爲にのみ勉めて行へば夫でよいのだ。予が滅  
亡に陥るとも又は救はれるとも更に關係した事でない、



神と借るな

言行 第二 八  
唯神を愛し萬事を潔く行へば以つて足れり。鬼にも角にも予は死に至るまで極力神を愛したと云ふ此の財賈ばかりは、少くとも是れ吾が所有物である」と言つた。實に君は四年の間此の苦悶に惱んで居つたが、遂には是れ全く信仰の足らざるより起るものであると悟つて、爾後完全き自由と絶えざる喜悅との中に、其の生涯を送る事が出来た。又自己は神の恩寵にあづかるの價値なき事を告白する爲、自己の罪惡を全然神と自己との間に置いた。けれど神は尙ほ豊裕なる恩寵を絶えず下し給ふたとの事である。

靈的生涯

絶えず神と對話したり又凡の行爲は是れ神に對して行ふものであるとの習慣を養ふには、先づ専ら意を神に注がねばならぬ。人少しく之に注意するに於ては、神の愛は克く此の習慣を内心に油然と起させるものである。君は神の與へ給ひたる愉快や喜樂の後には、必ず苦痛や艱難が代つて來ると豫め期して居つた。然し自分の力では何事も出来ないのであるから、神は必ず之に耐忍ぶに足る力を與へ給ふことを克く知つて居たので、何事の起つて來やうとも心閑に構へて居つた。  
君或る善事を行ふ機會に出遇ふと、先づ神に向つて「主

よ主が力を籍し給ふにあらざれば、僕には之を行ふ事が出来ませぬ」と言ふのが常習であつた。之に由て君はいつも十二分の力をうけた。

君自己の義務に對して過失を生ずるや、直に神に向つて「若し主が禁じてさへくだされば、重ねて此の過失を致しませぬ。僕の過失を止め再び過失に陥らぬやうにし給ふ方は、主を置いて他にはありませぬ」と懺悔する常習であつた。斯くして後始めて心に平穩を得たとのことである。

君屢々葡萄酒買入の爲めバアガンデーに遣はされた。

靈 的 生 涯

此の役目は頗る君の好まなかつた所で、一體此の任務が變化のない上に、商買の途にかけては随分下拙な方で、而已跛足であつたので、船中で樽の運搬に一方ならず困難を感じたからである。けれど君は酒買入の任務にも此の困難に對しても、更に不平がましい心を起さなかつた。其の度毎に神に語つて畢竟これ神の仕業を務むるのであると曰ふた。斯て己の任務を失策なく成遂げるのであつた。前年同じ任務を帯びてオーヴァーンに遣られたことがあつたが、如何にして此の任務を完成したかは君自身にも記憶がないが、兎に角其の結果は頗る満足すべきもの

であつた。

之と等しく厨房の任務も好ましからぬ一であつたが、  
 是とて神を愛する愛心を以て萬事を所理し、事毎に克く  
 其仕事を成遂げる事ができる様にと、神の恩恵を祈りな  
 がらに勉めたので、厨房に従事せる十五年間と云ふもの  
 は、何事にも困難を感じせず容易く思はれたとの事である。  
 當時君は自己の職を喜んで勉め、如何なる細事にても  
 神を愛する爲に其の事を行ひ、如何なる境遇にあつても  
 常に満足の念を懐いて居つた。故に前にも述べたるが如  
 く何事も敢て辭まなかつた。

る な 借 と 神

涯 生 的 靈

一定の祈禱時間など、君に於ては他の時間と區別する  
 の必要はなかつた。寺院長の命に従ふて祈禱の爲に一室  
 に閉籠りはしたものの、強ち斯る必要のあつたからでも  
 なければ、又君自身にも必要のあつたわけでもなかつた。  
 蓋し如何に多忙な際でも、君は神より遠ざかると云ふ事  
 がなかつたからである。

何事にも一途に神を愛し、勉めて之を實行したる君は、  
 敢て他に勸告者などを要せなかつた。然し自己の懺悔を  
 聽いて呉れる者は、大に君の必要とする所であつて、自  
 己の過失を悟れば大に悲み悔んだが、然ばとて其の爲に

神と借るな

落膽失望するやうな事は毫もなかつた。自己の過失を神に向つて懺悔する折も、赦を乞はん爲に彼此と神に辯疏するのではない、加之斯る懺悔をする際には、平穩で平常に變らぬ愛と尊敬とを以てした。

君、心に平和を失ふや敢て之を人には諮らずに、信仰の光によりて神の實在し給ふ事を感じて、凡の事たゞ神に諮詢つた。是によりて自己も満足し事の成行の如何にならうとも、君は唯神を喜ばし奉らん爲に斯は行つたのである。

無益なる思想は却て萬事を汚すもので、過失も之より

靈的生涯

生ずるものである。人若し緊要なる事柄や救拯に關して、或る思想が不穩當である事を認識たならば、速に之を退けて神との交通に立歸らねばならぬ。

當初君一定の祈禱中に屢々心散亂て、之を防がうとして徒に時を空費せし事があつたとか。又或人々の如く規矩を設けて神を禮拜するなどの事は出来なかつたさうであるが、然し最初の間沈思熟考を重ねるうちに、後には自ら容易くなつて來たとの事である。

總て肉體的の難行苦行を行ふても、若し此等の行が愛によりて神と一致しなければ、却て無用の長物である。

神と僭るな

夫れ一直線に神に至るの近途は、絶えず愛を行ひ神の爲に萬事を行ふにあるのである。

知識の行と意思の行との間には、雲泥の相違ある事を識らねばならぬ。知識の行は比較的價値のないものであるが、彼の意思の行に至つては至大の價値があるものである。人の唯一の務と云ふのは神にあつて己を愛し己を樂しましむる事である。

大凡肉體的の難行苦行は、一度神の愛を缺くに於ては些々たる罪だに償ひ得るものでない。吾儕は懸念する所なく心を盡してイエスキリストを愛し、其の血によつて

靈的生涯

諸種の罪惡を償はれ得べきもので、神は大なる憐愍の記念として最も大なる罪人に最も大なる恩寵を賜ふたではないか。

君が心靈上に經驗した苦樂と此の世に於ける最も大なる苦樂とを比較して見ると、到底比較物になつたものではないとの事。故に只管神の忿怒を招かぬやうに君は勉めた。

君は更に狐疑躊躇する人でなかつた。嘗て曰く「予は若し自己の義務を盡す場合に遭遇へば、直に斯う思ふのである、即ち予が過つのはこれ當然の事で自己に倚頼し

に於ては決して改まるものでない。然し萬一過失がなかつたならば、是れ其の力は正しく神の賜であると思つて、直に感謝を捧げるのである」と。

言行 第三

神と借るな

君嘗て語りて曰く氏が靈的生涯の基礎は、神を敬ひ神を重ずるに基いたもので、一度之を確認した當時より心を専にして、全く自己の行爲が神を愛する方面にのみ働くやうにと、種々の雑念を追退けた。随分長い間神に就て何事も念はずに平氣で居た時、突然自己の犯した此の

靈的生涯

罪を思ひつきて、神を忘れて居た事を思出すにつきて、以前にまさる一層の信仰を喚起した。

人いよく神に倚頼めば益々神を敬ふに至るもので、大なる恩惠も之に由てうけ得られるものである。

神は決して欺き給はぬばかりか、完全く神に仕へ神の爲とあらば何事も耐忍ぶ程の者を、いつ迄も艱まし給ふ事もなければ、又神御自身にも斯る事は忍び得給はぬ所である。

君の經驗によれば、如何なる場合にも神の恩惠深き助は立所に來るもので、此の經驗によつて君が或る任務

神と借るな

に着手する際には、敢て豫め彼此と考へなかつた。既に着手するや恰も物の明鏡に映るがやうに、直に自己の爲す事が神に對して適當なる所置である事が悟られる。現今では斯様な取越苦勞もせず、萬事を所理するやうになつたが、未だ經驗乏しき以前には、事に際して愚にもつかぬ種々の憂慮をしたとの事である。

俗務の爲に暫し神を忘れて正路を踏はずして居る時、新に神を想起す折の嬉しさ欣ばしさは、言ふに言はれぬ程である。

君の俗務を執る時は、退いて神に仕へまつる時よりも、

靈的生の涯

一層親しく神と一致したとの事である。

爾來君は肉體上にか或は心意の上にか、或る一大苦痛が起つて來ると豫想して居た。抑此の豫想の中にて君が最も懼れた所のものは、幾歲月の間身を喜ばした其の神に就ての感情が失せはすまいかとの事であつたが、然るに神の慈愛に護られて神は君を見捨て給はざるのみならず、其の遣はし給ひたる困難には如何なる事にも忍耐しされる方まで授け給ふ事を確く信ずるに至つた。故に君は何事にも恐怖惑はず又自己の出來事につきて更に他人と諮る事もせず、若し諮るべき必要があれば却て君の惑

神と借となる

の種となつた位であつた。又君は神を愛する爲には一身を抛つも敢て辭せざる程の覺悟を有ちて、如何なる危険にも恐怖れると云ふ事を知らなかつた。實に全く身を神へ委ねまつる事は天に至るの確實なる路で、此の路こそ吾儕日常の行爲を照す光である。

吾儕が靈性的生涯の發端は、先づ忠實に自己の義務を務め自己を度外に置くことが最も肝心な事である。すると言ふ可らざる喜悅が従つて來るもので、困難に遭遇はば只管イエスキリストに倚頼みて、其の御恩恵を願ふ外更に何も必要がない。斯くすれば凡百の事易々たるものである。

靈的生涯

多くの基督教徒が信者の進歩を爲さざるは、要するに懺悔式にわれ其の他の儀式にわれ、其の精神たる神を愛すると云ふ事を怠るからで、之は明白に其動作に現れて居る。確乎たる道德の世に行はれぬのも之が爲である。神に近寄るには技術とか學問とか左様なものは毫も要らぬ。靈神の他何物にも自己を委せぬ事が肝要で、即ち神なるが爲に神を愛すると云ふ確な心があれば夫でよいのである。



言行 第四

神と借るな

君は神に近づく方法につきて屢々胸襟を開いて予と共に談じた。其の幾分は己に述べたる如くであるが、嘗て予に語つて曰く「神に近づくかんとすれば先づ第一に自己を神に近寄らせまいとする一切の障碍をば深く放棄してしまはなければならぬ。次には絶えず神と共に自由實直に交通する習慣を養ふことで、神は吾儕の眼前に在ます事を確く認めて、何事にまれ疑はしき點あらば先づ神の聖意を諮り、神の吾儕に要め給ふ所を明白に悟り得たら

靈的生涯

ば、之を正しく成遂げる事の出来るやうに其の御幫助を祈り、將に其の事に着手するや全く神に委ねまつり、爲遂げたる後には感謝を奉る事が大切の義である。又斯様に神と交通談話する折には、限なき神の聖善と其の完全とにつきて、絶えず讚め且つ敬愛すべきものである」と。よしや自己罪を犯すとも其の爲に勇氣を挫かずに、主イエスキリストの限なき御功績に全く倚頼みて神の慈愛を願はねばならぬ。神は吾儕の如何なる行爲に對しても、恩寵を垂れ給はぬと云ふこと更になきものである。若し自己が神の實在てふ觀念より離れて居るか、左もな

神と借るな

くば神の御幫助を願ふ事を忘れて居らなければ、此の恩寵は確實なものである。

神を喜ばし奉ると云ふ外に、決して他に何等の目的を有たないならば、神は必ず吾儕の疑惑に對して光を與へ給ふものである。

吾儕の聖潔くなるのは自己の職業を變へるからではない、平常自己のために爲て居た事を神のために爲すからである。然るに世の人多くは方法と目的とを取違へて、我慾主義で營むところの職業に耽るのは實に慨嘆すべき事である。

靈的生涯

神に近寄る最も優れたる方法は、唯人前を喜ばす爲でなく(加拉太一〇十。以弗所六〇五、六) 精一杯に唯々神を愛する爲に日常の職務を爲すの一事にあるのである。

祈禱の時と他の時とを區別するのは是れ大なる間違である。祈禱の時は勿論祈禱によつて神に密接しなければならぬが、他の労働の時にありても亦左様でなくてはならぬ。

君の祈禱をするや、祈禱の間は神の愛の他何事をも思はずして、只管神の面前に在る事のみを心に念じた。祈禱の終りたる後も相變らず全心を盡して神を讚め神を敬

神 と 借 と な る

ふが故に、絶えず歡喜のうちに其の日を送つた。一層心の熱誠な時には、神が或る艱難を自己に與へ賜はらん事を却て希望した程である。

吾儕は誠心より神に倚頼み、尙神は吾儕を欺き給はぬ事を確信して、全く自己を献ぐべきものである。

神の愛の爲には些細なる事にも決して倦怠つてはならぬ。神は事業の偉大なるを貴び給はず、却て其の事業の發動である愛を貴び給ふものである。又事業の當初に當つて屢々勵めど屢々徒勞に歸する事のあつても、これは決して怪しき訝るには當らない。漸々爲るうちには遂に

靈 的 的 生 涯

知らずくの間活動が起つて、後には却て之を自己の喜悅とする習慣が出来るものである。

それ宗教の眞髓は信仰と望と愛とであつて、之を實行することによつて神の聖旨に適ふ者となれるのである。其の他の事は唯吾儕の目的に達する一手段に用られるに過ぎざるもので、且つ悉く信仰と望と愛とに含蓄せられてあるのである。

凡の事「信」する者には爲し得ざる事なく、「望」む者にありては信する者より一層容易くして、「愛」する者に於ては猶は一層容易に爲し得るものである。而して此の三

の徳を兼備へて實行する者には、層一層に易々たるものである。

永遠に至るまで吾儕は生命あらん事を希望する如く、此の世にありても出来得るだけ只管神に仕へ奉る事を、最上の目的として勉めなければならぬ。

靈性的生涯に入らんとする時には、先づ十分に自己を顧みて奥底まで吟味して見なければならぬ。左すれば自己は誠に賤むべき者で、基督信者と稱へらるゝ價値のない事がわかつて来る。すると肉體上や精神上や或は又内外の境遇の上に様々の障礙のある事に心注いで、畢竟是

る な 借 と 神

涯 生 的 靈

れ神が種々の苦痛や障礙によつて、自己を謙遜せしめ給ふのである事を悟つて來、之によつて如何なる誘惑や反對が起つて來ても毫も驚かなくなつて來るものである。却て他人の爲すまゝに任せて、自己に取ては非常に利益あるものとして聖意のまゝに堪忍ぶ事が出来る。

人其の靈魂のいよゝ完全からん事を望めば望むほど、益々神の恩恵に倚頼むべきものである。

(以下の記事は敎兄ローレンス君につき書き叙したる他の記事より集めたるものなり)

曾て君と同居したる一人(此の人に就て君は餘儀なく

神と借るな

も公にした) 君に問ふて曰ふには、「如何なる方法によりて君は神の實在を悟りたるか」と。君答へて曰く「某始めて此の寺院に入つて爾來、唯神を凡百の思念、凡百の企望の目的とし、又専心自己の目標として居る故に、入門以來定まりたる祈禱の時間は、全く神をのみ考へる時として費した。これ學問的に道理を推究めたり、精細に熟考の上に熟考を重ねるが爲めと云ふよりも、寧ろ信仰の感念や信仰の光によつて神の實在を悟りて、深く自己の心の中に刻込まんが爲である。某は箇様に簡便なれども確實な方法で神の實在し給ふ事を絶えず自己の心に

靈的生涯

置き、出來得るだけ神を忘れずに一生を送りたいものであると決心して、神を識り神を愛することを勉勵んだ」との答であつた。

實に君は斯の如く常に祈禱によりて心中神を以て満したる後、自己の職務なる厨房の業に取懸つた(君は此の頃寺院の料理掛であつた)先づ料理の事につきて種々必要なる事や、又何時如何にして諸事を處理すべきやなどを考へ、猶は餘暇さへあれば仕事の前後には必らず祈禱をした。

君、業を始むるに當り恰も子が父母を信じて倚頼むや

神と借るな

うに、神に祈禱つて曰ふには「オ、神よ、汝は僕と俱に在ますが故に、今主の命令によりて此の俗務を心を用ひてなさしめ給へ。又常に主の前にありて恩恵を垂れさせ給へ。願はくは汝の補助を以て僕を祝福し、僕の働を嘉納れ僕の微意を採用げ給へ」と。

君復其の業に着手して居る間にも絶えず神と俱に言語を交換し、其の御恩恵を懇求め又萬事自己の爲す事はこれ神の爲めなりとして働いた。

君、業を終へるや如何に自己の職務を盡し得たかと必らず檢べて見、若し結果善ければ直に神に感謝を捧げ、

靈的生涯

然らざる場合には神の赦免を願ふのであつた。然し此が爲に勇氣を挫くと云ふことなく再び氣を取直して、苟且にも其の仕事中途にて放棄るやうな事はなくて、重ねて神の面前にありて自己の職務をなし續けるのであつた。君曾て語つて曰く「某は自己の過失に心注いたり又信仰と愛との行爲を再三繰返したりする事によつて、神を考ふる習慣を養成する方法とした。これは最初の程は頗る困難であつたけれども、今では神の事を考へないのが却て困難と思ふ程である」と。

實にローレンス教兄は神の聖前を歩むのは、非常に利

神と僧なる

益ある事と知つて居たので、勢自身も熱心に之を他人に  
 勧めた。然し君自身の實行が如何なる言よりも一層の誘  
 導となつたのである。且つ君の容貌品格も平穩にして加  
 ふるに敬虔の念溢れて居たので、君を見る者は誰一人と  
 して感動しなかつた者はなかつた。而已厨房で眼も眩む  
 程忙しく立働いて居る時でも、心は尙ほ天を仰いで居た。  
 實に君は諸事急がず騒がず、左ればとて猶豫なく間斷な  
 く平穩に無事に何時も心を保つて、時に應じ機に適ひて  
 職務を爲した。君曾て曰ふには「就業の時も祈禱の時も  
 某に於ては差別はない。厨房の騒々しさや又は數人同

靈的生の涯

時に種々雑多の食物を求めて來ても、丁度幸福な聖禮典  
 にあづかつて居る時のやうで、平穩無事に神を樂むこと  
 が出来る」と。

書簡集

書簡 第一

神と借るな

貴下は吾儕の主が其の御恩恵によつて某に授け給ひたる神の聖前に在りと云ふ習慣を如何にして某が養ひたるか、其の方法を示せとの御懇望に候得共、是は御話申上ぐるに頗る困難なる次第に御座候。然し豫め某の書簡を決して他には示さじとの御約束を以て、一通り茲に陳述致すべく候も、萬一他に示すやうなる貴下と知り候は、某は元より貴下の靈性上の進歩を希望致居るにも拘

靈的生涯

らず、一も二もなく御断り申すところに候。先づ其の方法と申すは左の如くに御座候。  
 某曾て神に近寄る種々の方法や靈性的生涯に關する雜多の實行を書記されたる數多の書籍を閱讀致候が、此等は却て某の希望なる如何にせば全く神のものとなり得べきかと云ふ問題を容易に悟らしめ候よりも、寧ろ種々様々に心を惑はしたる所に御座候。之によつて某萬事を抛棄て只管此の目的を達せんものと決心仕り、己が罪の赦をうけん爲に全く自己を神に捧げ奉り候。斯て神を愛する爲には神ならざる總ての事物を棄て候て、現世には



神 と 偕 な る

神と某との他には何物も有らじとの覺悟を以て、吾が一生を送らんものと決心致候。時としては神の聖前に於て假令ば裁判官の脚下に跪伏せる罪人の如き思情も致せば時としては自己の心に神を吾が父、吾が神と親み奉りたる事も御座候。要するに某は常に神の聖前に在るものと心得、且神の實在を深く認識めながら一心に禮拜を勉め申候。若し心の散亂れ候事に心づき候折には、直に此の心を取纏める事と致し候。斯の如く奮勵致候當時は、苦痛とか困難とか申す事更に無之、また心の散亂致す時にも一向心に平穩を失ふ事も無御座、且如何なる困難起り

靈 的 的 生 涯

候とも勵み續けて勉めたる次第に候。實に某は宛然祈禱の時に於けるが如く、専心此の事を己が終日の業と思ひ、時々刻々勞働の最中に於ても神を思念ふ思想の妨碍となるものは、總て之を心中より追出し申候。以上は某が聖別され候爾來常に實行致し來り候ところにて、よしや不完全なる方法とは申しながらも尙之によりて大なる利益を得たる所に御座候。勿論これ神の慈愛と其の恩寵とによるべき事は申す迄も無御座候。蓋し人は神を離れては何事もなし得る者に無之、況て某の如き取るにも足らぬ輩は猶更の義に御座候。

書簡 第一  
四二  
それ吾儕が忠實に神の聖前にありて常に吾が前に神を置く事は、常に神の怒を招くことを防ぎ神の聖心を痛め奉る事を禦むるのみならず、聖なる自由乃ち神との親睦をいよく結びつける所以にて、斯てこそ必要なる御恩恵をも願ひ得らるべきものに候。要するに反覆繰返して之を實行致すうちには、自然と自己の習慣となりて神の實在は普通の事と可相成候。願はくは某が未だ感じ得ざる廣大なる御恩寵、其の他某のごとき憫むべき罪人に下し給ひたる妙なる御業とを、俱に感謝なし被下度候。願はくは萬有の神に讚美あれ。

アーメン

書簡 第二 (某教師に送りたるもの)

某は書籍上に於て生活の方法を見出し不申候、併し之に就て更に何の困難をも感せず候へども、尙は安心の爲め茲に貴下の御意見を一應伺ひ度義有之候。

先日或る敬虔なる人と會談中、其の人の申され候には抑靈性的生涯は恩恵の生涯にして、服従的恐懼より始まり永生の望によりて増加はり、純潔なる愛によりて完備するものなり。而して此の三状態はそれと異りたる境

る な 借 と 神

にあるものにて、遂には完全き幸福の境に入るものなりと。然るに某は一切此の方法を採らざるばかりか、抑此の三の状態とは如何なる本性のものなるかさへ存じ申さず候。其の爲め某は甚く勇氣を削がれたる次第に御座候。某が聖別せられ候際には唯だ神の愛に酬い奉らんため自己を捧げまつり、神を愛するが爲に一切萬事を抛棄てんと決心致し候。

最初一年間は一定の祈禱の時間中は、唯だ死、審判、天国、地獄並に自己の犯したる罪の事のみを考へ、他の時間や仕事に取かゝりたる最中に於てさへ、恒に某と俱に

涯 生 的 靈

在し或は時々某の心に宿り給ふと信せし神の實在に就て只管考へ申候ところ、遂には一定の祈禱時間中にも知らずくの間にこれと同様なる有様と相成り、爲に大なる喜悅と慰藉とを受け申候。かくて斯る實行は自然に神を尊重する念を産出すこと、相成りたる次第に候。最も此の點に向つて満足を與へ呉れ候ものは番信仰のみに御座候。

(編者謂らく神につきさての區々別々なる總ての觀念はローレンス教兄の満足せざる所にして、其の價値なきを君は知れるが故なり。故に信仰乃ち神の實體は

無限不可知なる事を認めて到底人間の考慮にては思  
料り得ざるものとの立場より観るに非ざれば他は皆  
満足すべきものにあらずとの意味ならん

以上は某が神の實在を認識致し候初期にして、有體に  
申せば其の後十年間は頗る種々と心を搔亂し候て、自己  
は自己の思ひ居る程に果して神に捧げたるかの恐懼や、  
又吾が心に絶えず過去の罪惡の現存せる事や、且は受く  
べき何の功績もなき身に神の與へ給ひたる御恩惠などが  
凡て某の苦悶の種と相成申し候。實に斯る期間と云ふも  
のは屢々躓かんと致しては再び起上り、總ゆる被造物

も道理も又神自身さへ某に逆ひ、獨り信仰のみ吾が爲に  
用をなすかの如く思はれ申し候。又時としては斯くも非  
常なる恩惠をうけて、他人が困難を積みて達したる地位  
に自己は苦もなく達し得たりと思ふにつき、爲に却て煩  
悶に煩悶を重ね候事も有之、或は又之を勝手過ぎたる我  
儘の事にして、吾に於ては救拯さへあるなしなど思ひ候  
事も御座候ひき。噫此の煩悶の日が一日も速に過去れか  
しと念ずる外には更に他を思ふ閑暇さへ之なき時（此の  
事は神に倚頼む心を毫も減ずる事なく却て某の信仰を  
増し加へたるものに候）突然萬事吾が身に變化の起りた

神と借るな

る事を心づき申し候。爾來煩悶に煩悶を加へ居候。某の  
 靈魂は、此の時に至りて恰も平和の中心、安息の場所に  
 包まれたるが様に内心大に平和を得申し候。夫より後は  
 唯信仰によりて謙遜と愛とを旨として神の聖前に歩み、  
 行爲に於ても思念に於ても唯聖意を痛め奉らぬ事を勉め  
 候。何事にまれ某の爲し能ふ所を爲す場合には、願はく  
 は聖意を喜ばし奉るやうに爲さしめ給はん事を只管祈り  
 居申し候。

現時の有様に就ては聊か申し述べ難く候。某は神の聖  
 旨の他に私の意志と云ふものを更に加へ不申候へば、苦

靈的生涯

痛とか困難とか申す事は露だに感じ不申候。唯神の聖旨  
 とあらば進んで萬事を行ひ、神の命令に従ひ神を愛する  
 意思より出るに非ざれば僅一本の塵芥だに拾ふ事を致さ  
 ぬ程に聖旨を遵奉致居候。且某は禮拜上の儀式其の  
 他止むを得ざる事々の外には規定の祈禱さへ廢止致候。  
 斯て如何なる場合にありても些細なる注意によりて神の  
 聖前に在る事と、神を樂しむと申す事とを確く守り候て、  
 之を自己の義務、己の仕事と心得居候。言を換へて申せ  
 ば是れ神と吾が靈魂との習慣的穩密なる交通にて、これ  
 によりて心の内外に大なる歡喜を得られ申候。要するに

る な 借 と 神

最近三十餘年來 某の靈魂が神と俱に在る事を認識候て  
更に自身にも疑ひ不申候。餘り管々しき事は茲に省き可  
申候も、某が神すなはち吾が王の前に在る事を御報知致  
すは無益の業にはこれなかるべくと私に存じ申候。  
吾が身こそ負傷腐敗に全身を汚し、王に逆ひて種々の  
罪惡を行ひたる人間中 最も憫むべき者なりと心づき、  
甚く悔改めて己が罪を懺悔し、以て只管王の赦免を願ひ  
申候。且又聖旨のまゝになし給へと神の聖手に一切自己  
を委ね奉り候。然るに憫と愛とに充ち給ふ王は某を懲  
しめ給ふ事もなく、却て愛の聖手を伸して某を抱き給ひ、

涯 生 的 靈

御手づから財庫の鍵を授けたまはり候。而已種々の方法  
によつて間斷なく某と語り給ひ、嘉し給ふ所、寵で給ふ  
者として某は取扱はれ候て、實に時々刻々 某は神の聖  
前にあるを自覺申候。左れば某の最も有益なる方法と申  
すは乃ち右の如く單純に神に眼を注ぎ、神を愛慕措かざ  
る事に候。實にや某は慈母の胸懷にある嬰兒よりも猶一  
層深き美しき喜樂を以て神に愛着し吾が之を味ひ之を經  
験して言語にも筆にも述べ盡されぬ其の美しき状態は神  
の胸懷なりと名づけ候はん哉。さて若しも或る事情によ  
りて心神の散亂れ候場合あらば、某は内心言ひ難き愉快

る な 借 と 神

を以て再び舊に召還さるゝ嬉しさ、元より斯の如きは某が價值もなければ感謝の念にさへ乏しき者なるに係らず神の大なる恩恵による事と御合點被下度候。

一定の祈禱時間に就ては唯同じ様なる事を續けて致すと云ふに過ぎ不申候。例へば彫刻師が或る像を刻み出さんとする石の如きものにて、神の聖前に自己を棄て、吾が靈魂の中に完全なる神の聖顔を刻みつけ、全く自己を神に似せん事を願ふ一條に御座候。此の他の祈禱の時に於ても己が心意も靈魂も自然と高く揚げられて、神と共に結びつく思念致候。

涯 生 的 靈

或人は此の状態を目して無氣力にして自ら己を欺き且自愛なりと批難致すやも計られず候が、去ながら若し人の靈魂が此の状態に於ても適合するものに候はゞ、これ聖き無氣力、楽しき自愛なりと某は思ひ居申候。何故と申せば靈魂が此の平安なる状態にある間は、久しき以前より習慣となり居る行為に依て更に擾亂される事無御座候。此の習慣の行為こそ一時某は自己の靈魂の大黒柱として重んじ候が、現今にありては却て種々に妨碍と相成るものに候。然し自ら自己を欺くものと被申候に至つては、これ某が堪へ得ざる所に御座候。夫れ神を樂ませ奉

書簡 第三  
五十四  
らんとする人の靈魂は、神より他に何ものをも望むべからざるものに御座候。果して自ら欺くものと致し候は、之を癒し給ふは神にして、聖旨のまゝになし給へと祈る所に候。某は唯神を望み全く神に聖別せられん事を希願ふのみに御座候。

某は貴下に對して特に尊敬の念を抱き居る者に候へば何卒御高説御漏し被下度懇願の至に御座候。稽首。

書簡 第三

幸福なる哉、吾儕は限なき恩恵に満ち凡て吾儕に必要

なる事物を知す召す所の神を有ち居候。某は神が最後に至る迄貴下の御服従なさる事を望み給ふ事と存じ居候。夫れ神は身ら定め給ひたる時に來りたまひ又貴下が思ひかけなき時に來給ふものに候へば、一層神を待望み給はん事を希望致候。且又從來神の下し給ひたる御恩恵と、殊に今般貴下の艱難に際して與へ給ひたる剛毅と忍耐とを感謝なさるべく候。そも此等の事は神が一層貴下を顧み給ふ顯著しき徴候に候へば、神によりて自己を慰め萬事感謝被成べく候。

某は又某君の勇氣と忍耐とに深く感服致す者に御座候

書簡 第三



る な 借 と 神

神は此の人に善良なる性質と意思とを授け給ひ候も、尙其所には幾分か此の世につけるところあると、青年活氣の氣に溢れすぎたるを見申候。故に某の希望致す所は神の遣はし給ひたる此の困難によりて同君が大なる利益を得、且つ自己を反省せられん事に御座候。これ何地にありても常に伴ひ給ふ神に一切倚頼む心を起さしむる原因と可相成、又同君にして心を盡して神を念ひ殊に大なる危険に際しては一層に神を念ひなされて、場合あらば神を仰ぎ見、以て大なる利益を得られ度きものに候。劍を帯びて進軍なされ候折にも内心禮拜の動作なる神を憶ふ

涯 生 的 靈

こと乃ち祈禱はよしや簡單に候とも、この神の喜んで受納れ給ふものに候故、危険の場合に臨み軍人の勇氣却て百倍する所可有之候。左れば能ふ限り屢々神を念ひ僅とは云へ此の貴き實行を續けて次第に自己の習慣となされ度きものに候。加之、斯様に人の目にも留らず日々僅ながらの内心の祈念を屢々疑らすことは最も容易き業に可有之候。何卒前述の如く同君が出来得るだけ度々神を念ひなさるやうに貴下よりも御勧告下され度候。日々生命を的にして幾多の危険にも出遇はるべき軍人にとりては、是れ甚だ適當にして

又最も大切なる義に御座候。

願はくは神が同君と其の家族とを眷顧給はん事を幾重にも祈る所に御座候。尙ほ某よりも宜敷と御傳言被成下度候。草々。

書簡 第四

某は今吾儕の同僚の一人が神の實在を認識たる好結果並に其の利益とを御通知申上度候。願はくはこれに由て貴下と共に益する所あらば誠に幸甚の至に御座候。

此の人其の身を神に献げて爾來四十餘年の間勉めて常

に神と俱にありて、神の喜び給はぬ事は何事も行はず何事も語らず又何事も思はじと慎み候。而もこれ他意ありて斯く勉めたる譯には無御座、唯潔く神を愛し奉らんが故のみに候。加之此の人は斯の如く勉め候ても猶足らぬやうに思居候。而して今や之によりて如何なる場合にも絶えず慰安をうけえられる迄に深く神の實在を以て自己の習慣となし居候。故に殆ど三十年間と云ふものは吾が同僚の靈魂は、言語にも筆にも盡されぬ喜樂に充ち溢れ居申候。

若し時として神の實在し給ふを忘れ候場合には、神は

神と借るな

同僚の靈魂を召還し給ひて再び實在を認めさせ給ふとの事に御座候。最も斯る事は俗務に取紛れ居る際に屢々起る由にて、彼は神を仰ぎ柔和なる心をもて慕ひまつり、且つ愛情深き言語にて、「吾が神よ、僕は茲に全く汝に委ね奉る。主よ、聖旨に適ふものとなし給へ」との意味を以て此の召還に答へ奉るとの事に候。然か致し候後には愛に富み給ふ神は斯る言にも満足し給ひて、再び彼の靈魂の奥底に安坐し給ふやうに覺ゆと申候（同僚は實に然か信じ居候）。

彼同僚は斯る經驗によりて神は常に其の靈魂の奥底に

靈的生の涯

息み給ふ事を確認し、又如何なる事によりても決して疑ひ不申候。彼は常に心中斯る寶藏を有ち居候事なれば、如何ばかり満足なるか、其は御推察被下度候。既に斯る寶藏のある以上は殊更に搜索ひるの必要も無御座、何時にても自己の欲するがまゝに此の寶藏は彼の前に開放あり候。

同僚の常に訴へ且つ唱ふる所は、吾儕は盲目なるが故に僅少を得れば以て満足せる淺墓なる者なりとの事に御座候。彼の申す所によれば神は吾儕に與へ給はんとして測知られぬ寶財を有ち給ふ。而して吾儕は一時的熱心を以

神と借るな

て之を受けんと勉むる腑甲斐なき者にて、元來盲目なる  
 が故に却て神を吾が目の前に遮り、神の恩恵が滔々とし  
 て流れ来るを故意に禦止めんと致す者に候、去れど神は  
 活ける信仰を以て充てる其の心を見給ふに於ては、これ  
 に愛と恩恵とを豊に注ぎ給ふ事、恰も急流の直下するが  
 やうにて、水流の通路を強て禦止むれば更に一の通路を  
 たどりて滔々と豊裕に溢るゝが如しと申候。

右には某も亦頗る同感の至にて、吾儕は自己を輕んじ  
 過ぎて却て此の恩恵の急流を禦止むる事往々有之候。吾  
 儕は今後決して斯様なる事のなきやうに注意し、却て自

靈的生涯

己を妨げ之を禦ぐ障礙物を取除け申さずては不相成候。  
 且つ勉めて恩恵の通路を備へて以て、お互に餘命も長か  
 らじと思はれ候へば、今日迄に失ひたる處を償ふ心懸こ  
 そ肝要なるべくと存候。噫、死は程遠からず來るべく候  
 へば、遺憾なく之が爲に準備致し度きものに候。蓋し吾  
 儕は唯一度死するばかりのものに候間、其の準備を十分  
 致さるに於ては遂に挽回し能はざるものと可相成候。

實に幾度も繰返しお互に反省すべき義にて、最早時は  
 差迫り來て猶豫すべき餘暇さへ無御座、吾儕の靈魂は今  
 や危急存亡の秋に近づき居候。さて貴下には勿論其の爲

に十分の御準備も整ひ、死に對する御心配もなかるべく  
 と存候も、尙ほ老婆心にかられて茲に是非大切なる一事  
 のお勧め申上げ度義有之候。それ心靈的生涯の進歩致さ  
 ぬと申す事は取も直さず退歩致すと申す事と同一の義に  
 御座候へば、常に此の事につきて一層の御奮勵こそ望ま  
 しく御座候。一體聖靈に勵まざるゝ者は睡眠の中にすら  
 尙ほ進歩致すものにて、吾儕の靈魂は世を渡る航路に於  
 て雨や嵐に揺動かされるが通常の事に候故、先づ靈魂の  
 中に安座し給ふ主を喚起さるべく、然せば主は速に波濤  
 を鎮め給はるべく候。

以上は唯貴下の御感念と某の感念とを比較せんが爲に  
 述べ候次第にて、若し不幸にして（然る場合にはこれ一大  
 不幸にして某は然らざる事を祈る）此感念が少許にても  
 冷却致居候場合には、或は此の書翰によりて熾に燃出す  
 材料ともなりて、お互に最初の感念に立歸りたきものに  
 候。又世の人こそ知らね、神にはよく識られて而も深く  
 愛しまれ居候彼の同僚の實例を互に學びたきものに御座  
 候。某は常に貴下の爲に祈るべく、貴下も亦主にある某  
 の爲に御祈り被下度候。敬具。

書簡 第五

神と借るな

目下寺院に入らんとて其の準備を致し殊に貴聖會と貴下との祈禱を懇望せられ候去る姉妹より、二卷の書籍と一通の書簡を受取申候。此の姉妹は深く祈禱に倚頼む方に御座候故、何卒同人を失望せしめざるやうお依頼申上候。願はくは彼女が唯神を愛する爲と且つ全心を盡して神に仕へまつらんとの堅き決心を致すやう御祈禱被下度候。

茲に彼の神の實在を論ずる二卷の内、一巻を貴下に贈

靈的生涯

呈仕候。某の考ふる所によれば本書は靈性的生涯の全體を論じて餘蘊なく、若し正しく之を實行致候は如何なる人にてても靈性的の人と可相成と思はれ申候。其の正しく實行致すに就ては決して他の事を心に留め候ては不相成候、何となれば神は唯一人にて人の心を専有せんと欲し給ふが故に御座候。左れば吾儕心に神を保有とならば、豫め總ゆる雜念を除去りて空虚となし置く事肝心にて、神は吾儕の心を全く明渡すに非ざれば其の欲し給ふ如くに人の心の中に働き給はざるものに御座候。

世に神と俱に間斷なく交る事程美しくも亦樂しき事は

神と借るな

復と有之まじく、之を實行經驗せし人々のみ此の眞味を  
了解し得るものに候。然し美しく樂しさが故に今貴下へ  
お勧め致すわけには無御座、唯々愛に勵まされて實行せ  
られたるものに候。

鳥許がましき申分には候へ共、若し某が説教者の地位  
にあるものに候は、餘事は措置を先づ第一に神の實在  
の實行を人々に勧むる積に御座候。若し又某が指導者  
の地位に有之候は、「これ肝要なる事にして又容易なる  
事なれば爾曹勉めて之をなせ」と世の人に説勧め可申候。  
噫、吾儕にして神の恩寵と神の幫助との必要を確に認

靈的生涯

め居候は、瞬時も神を忘るゝなどあるまじき義と存じ  
申候。神を愛する爲には如何なる慰樂をも聖旨に適はざ  
る以上は糞土の如く棄て候て、進んで心に神を宿しなが  
ら餘命を送る決心こそ望ましき所に御座候。貴下よ、勉  
め勵みて之を實行なされ度く、左すれば必ず其の効果は  
速に顯はれ來るべく候。尙ほ某の如き者も貴下の爲に  
祈禱を以て御助力仕るべく候。乍筆末貴聖會の方々に宜  
敷御傳へ被下度願上候。草々。

書簡 第六 (前同人に宛てたるもの)

神と借るな

某夫人へ御依托け被下候もの難有受取申候。先日贈呈仕候小冊子は已に御落手相成候事と存じ居候に、未だに貴下の御高説に接し得ざるは誠に遺憾に存じ申候。某は今貴下が御老年に達せられ候際にも尙ほ誠心より此の實行に従はれん事を希望する所に御座候。申す迄もなく遅く爲すは爲さるより優れるものにて、そも宗教に關係せる人々が、神の實在を認識ずして其の生涯を終るもの有之候は、實に某の合點し能はざる所にして、某

靈的生涯

の如きは出來得る限り心底に至る迄神と俱ならん事を勉め居申候。斯く神と俱なる間は何事にも恐懼の念無之のみならず、僅にても神と離るゝことさへ到底難堪御座候。元來斯る實行を勉むるは格別肉體上に骨の折れる事には無御座候。一體或種の愉快は無邪氣にして毒氣なきものには候へ共、場合によりてはこれさへ棄て候方が適當なる事も往々有之候。蓋し人自己の靈魂を神に委ね奉らんとする以上は、神と俱ならざる他の愉快を貪るべきものには無御座、故に元より棄るは至當の事と存じ申候。左ればとて無理に自己を制せよと某が申すわけには無之否寧ろ聖き自由を以て神に仕へ業務を勵むべき者に候。



若し神を離れて心散亂致候折には、敢て心配憂慮せず、  
静穩なる心を以て神に立還へらるべくお勧め申上候。

人は場合によりては一切の心配を掃潔め、又自己には  
甚だ佳と思はれ候或る特種の儀式をも離れて、全然神  
を信用し奉るべき必要有之候。尤も儀式とて強ち無益と  
申すわけには無之候へ共、理由もなく無暗に守るに於て  
は何の甲斐なきものにて、元來儀式なるものは吾儕が最  
後の目的に達する一の方法に過ぎぬものに候へば、之を  
棄てたればとて強て差支のあらう筈もなしと某は心得居  
申候。依て神の實在を確認して吾儕の最従の目的なる神

と俱に在る位地に達し候上は、最早斯る方法を重ねて行  
ふ必要も御座なかるべく候。去ながら時には讚美、禮拜、  
祈禱を捧げ、時には神に倚頼みて感謝を奉り、又或は吾  
儕の考へ得る種々の方法によりて、勉めて神の聖前にあ  
つて吾儕と神との愛を互に交換すべきものに候。  
若し斯る事を却けんとする念慮の起り候とも、決して  
失望致す事なく強て勉むる事大切の義に候。又無益の徒  
勞と思はれ候こと有之候とも、如何なる困難にも死に至  
る迄屈せず、撓まざる決心にて御進みなされ度候。乍筆  
末御聖會殊に貴下の御祈禱を懇望いたし候。不一。

書簡 第七

神 と 借 な る

誠に某は貴下に對し御同情の至に御座候。貴下若し何某氏へ御自身の職務を御譲り被成候て、専心神に仕へ奉る事ばかり御勉めなされ候は、これ大なる利益と存じ申候。神は吾儕に格別大なる要求をなし給ふわけに無御座、唯常に神を憶え、神を讚美し、神の恩恵を祈り、又或は貴下の患難を告げまゐらせて、何時にても下し給ひたる所の其の御恩恵や現在貴下の患難の中に下し給ひたる御恩恵を感謝し、出來得る限り神によりて慰安をうけ、食

靈 的 生 涯

事中也、人と交る時にも、神を仰ぎさへ致し候は、事足り申候。僅少に神を憶え居候ても神は尙ほ嘉し給ふものにて、敢て事々しく呼びまつる必要は無御座、案外神は吾儕の近くに在すものに候。

神と俱に在る爲にと常時教會堂に居る必要は毫も無御座、時々刻々の柔和、謙遜、愛なるものが即ち神と交る祈禱室なるべく候。如何なる人にてても多少は斯る交際の出來るものにて、神は如何程吾儕が爲し得るかを御存知に在ませば、何よりも先づ實行に取懸るこそ肝要の事に候。思ふに神が吾儕に對して望み給ふ事は此の場合たい

神と借るな

一の決断心に御座候へば、大に勇氣を振起されん事を幾重にもお勧め申上候。お互に餘命僅に相成候て貴下は六十四歳に手も達さかけ、某は殆ど八十歳の高齡と相成申候。御同様に神に在て生き、神に在て死に度きものに候。又神と俱に在る間は如何なる困難も甘じて受けられ、却て愉快なるを覺えられ申候。然ど最も楽しく面白き事も神なくば苛酷なる刑罰のやうに思はれるものには候はずや。神は凡の事に讃むべき哉。アーメン。

されば貴下も神を崇め其の御恩恵を懇求められ度、假令就業中なりとも怠らず自己の心を捧げ奉る習慣を御養

靈的生涯

成なさるべく、規則や儀式に拘らず寧ろ自由に愛と謙遜とを以て完全な信任を神に置かれたく存候。頓首。

書簡 第八 (祈禱中思想の教)

貴下の御通知は敢て事珍らしき事には無御座、思想の散亂する事によりて困り居る者は貴下御一人に限りたるわけには無之、人の心は非常に漂回るものに候が、唯意思ばかりは、吾儕の能力を宰るものに候ゆゑ、此の意思を召集めて最後の目的たる神に轉向はしめ度御座候。

元來最初に禮拜致す折、心を不注意ならしめたる爲斯

る思想の散亂を惹起したる者に候へば、此の習慣を破るは頗る困難なる業にて、よし意思に於ては好まぬ事とはいへ猶ほ地上の事を思はする原因と相成候。之を癒す方て法と申すは先づ自己の過失を懺悔して神の聖前に謙遜なる事に候。神と談話する折も言語多きと談話の長きとは却て思想を散亂せしむる基礎となり可申候へば、貴下も祈禱の場合に數多の言語を並べなさらぬやうお勧め申上候。左れば富家の門に立てる陞者か又は中風患者の乞食のやうな考にて、神の聖前に立つ事肝心の義にて、且又思想が散亂したればとて決して之を思煩ひなされま

じく、是によつて心を取纏めると申すよりも寧ろ却て紛擾を惹起すものに候。夫れ意思是穩に舊へ引還すべきものに候へば、貴下勉めて之を實行なさるゝに於ては神は必ず憐愍を下し給ふべく候。祈禱の時に容易く心を取纏め之を穩に保つ一法は「祈禱外の他の時に於ても心を神より離れざらしむる事」に御座候。貴下勉めて心を神の聖前にあらしめ、屬す神を念ふ事に慣れ候は、祈禱の場合に心穩にして思想散亂せざる様に上達するものに候。尙ほ某は神の實在を悟らんと勉むる事が、如何ばかり利益なるかは前便に畧申述べ

る な 借 と 神

候處なれば、願はくは吾儕眞面目を以て此の事を勵み、  
又お互に祈禱を以て相助合はん事不堪希望候。頓首。

書簡 第九

八〇

書 簡 第九

別紙の書簡は某婦人への返書に御座候ゆゑ、乍御面倒  
御手渡の程御願申上候。誠に此の御婦人は結構なる志を  
懐かれ居候も、神の恩寵の自然なる御導を越えて、一足  
飛に急進せんとする傾向有之候。然れど人は一足飛に全  
く聖きものとなり得るものに無之候へば、某は貴下が此  
の婦人を貴下の御指導の下に御置き下さらん事を懇請致

涯 生 的 靈

候。御互に千言萬語を費すよりも實行を以て相助け相勵  
み合ひ可申、又時々本人の神に従順にして熱心なるや否  
やを某にも御知らせ被下度候。吾儕の守るべき本分は唯  
神を喜ばし奉る一事にして、其の他の事は凡て愚にして  
定まりなきものに候。業に貴下と某とが寺院に入りてよ  
り爾來四十年の歳月を送り、神の御慈愛によりて此の状  
態に召出されたるお互は、神を愛し神に仕へんと志して  
早や四十年を過したる者に御座候が、過去に於て神の下  
し給ひたる御恩恵また今も尙ほ引續き賜ふ所の御慈愛を  
つらく考へ見れば、ア、某は之を善用せずして完全に

書簡 第九

八一

達することの遅々たるを思ひて、轉た恥かしき限りに御座候。

神と偕なる

神は御慈愛によりて尙は吾儕に暫時の餘命を賜ふべく候へば、熱心以て嘗て空しく費したる時を償ひ、更に疑惑を挾まざる信用と愛とを以て、吾儕を納れ給ふ父なる神の御許に歸るべき筈に候。神を愛する爲には神ならざる凡の事物を抛棄つるは至當の事には候へ共、此だけにては僅に吾儕の本分を盡したりと言ふに過ぎず候。左れば吾儕絶えず神を念ひ何事に拘らず神を信じ頼むべく、斯て一層の恩恵をうけ候は、其の結果は蓋し好良なるべ

靈的生涯

候。一度恩恵をうければ吾儕諸の事を爲し得べく候はんも、之をうけざるに於ては爲す事凡て罪のみに御座候。且又神の確實にして間斷(たえ)なき幫助なからんか、吾儕日常出遇ふ所の數多の危険を免る、事は到底出来不申候へば、絶えず此事につきて神に祈るべき筈に御座候。然れども吾儕神と俱ならずして如何で神に祈る事の出来申すべき哉、神を念はずして如何で神と俱なる事の出来申すべき哉、又如何で習慣なくば神を念ふ事の出来べき哉。貴下或は某を批難して汝は常に同様の事を繰返し言ふのみと申され候やも計り難く、誠に仰せ御尤には候

神と借るな

へ共これ某の知れる中にて最も良く、最も容易き方法に御座候。而も某自身にも他の方法は一切用ゐ不申候故、從つて世の人にも斯く爲し給へとお勧め致す次第に候。大凡愛(い)するに先ちて先づ其の事物を知(し)るが順序に候故、神を知(し)るに先ちて先づ神を念(ね)ひ、神を愛(い)すべき事を知りたる後にも尙ほ神を念(ね)ふべきものに候。蓋し財寶の在る所には心も亦在るものに候。これ争ふべからざる義と私に存居候。草々。

書簡 第十

靈的生涯

某君へ直接書簡を贈るは聊か憚る所有之候得共、貴下並に某婦人の御懇望黙し難く、爲に茲に書贈る事と致し候間宛名御書添の上御送附被下度候。さて某は貴下が神に對して厚き信任を置かれ候事を喜び居申候。願はくは益之を厚からしめ給はん事を神に祈る所に御座候。此の世に於ても、また未來の世に於ても決して見棄て給はざる善良にして且つ忠實なる友を信じ過すと申す事は夢これなかるべくと存候。

借某君が今般親しき人を失ひたる事につき、之を善用して全く神を信じ、神に任せ候は、再び一層有益なる

侶伴者を神は與へ給ふべく、夫れ神は聖意のまゝに人に  
向つてなし給ふ御方に御座候。思ふに某君は其の失ひた  
る人に對し愛着禁じ難くあられ可申、これ吾儕が神に對  
し奉りて有る所の愛心を妨げざる限は、自己の侶伴者を  
愛するは勿論至當の事に御座候。

以前某が貴下へ御勤め申上候通り、夜も晝も就業中も、  
遊戯の時にも、神を思ひてお忘れなきやう祈申候。神は  
常に貴下の程近くに在して貴下と俱なり給へば、夢にだ  
に神より離れて孤獨となられまじく候。假令ば貴下を訪  
問に來れる友人に面會せずして孤獨にうちやり候事は、

貴下も亦無禮なる業と思召しなさるべく、左すれば神も  
亦何とて人を輕忽になさるべき、故に神を忘れず常に念  
頭にかけて絶えず敬ひ、又生くるも死するも神と俱にな  
され度候。これ實に基督信者たる者の榮譽ある本分にし  
て、謂はゞ吾等の天職に御座候。若し貴下にして之を御  
存知なくば新に學ばれ度、某も亦祈禱を以て御助力可  
仕候。頓首。

書簡第十一

某は貴下が苦難より救出されん事を願ふよりも、寧ろ



神と借るな

神の聖旨なる以上は貴下が其の苦難に堪忍び得んため力  
 と忍耐とを興へ給はらん事を只管神に祈る者に御座候。  
 斯る十字架を背負はせ給ひたる神によりて慰籍を得られ  
 度きものに候。神其の聖意に適ふ場合には再び其の苦難  
 をゆるし下さるべく、神と俱に在りて艱む者は誠に幸福  
 なるものに御座候。斯てこそ艱難に練達も致すべく且は  
 必要に應じて之に堪忍ぶ力を懇求めらるべく候。世人が  
 此等の道理を辨へざるは敢て怪むべき事には無之、蓋は  
 基督信者の如き心得を有たざるが故にて、一朝疾病に罹  
 ること有之候へば是れ自然に起りたる苦痛とのみ思ひ候

靈的生涯

て、神の大なる恩恵より出たるものとは更に心づかずに  
 居申候。左れば彼等は唯悲嘆とか苦痛とかのみを感ずる  
 に過ぎず候へども、疾病を以て神の恩恵の結果また救拯  
 の方便として下し給ひたるものと心得居る人々には、却  
 て斯る中にも大なる喜悅と慰籍とを覺ゆるものに御座  
 候。  
 神は健康なる時よりも病中に於て一層吾儕の近くに在  
 して、尙一層屢々（或る意味にて）吾儕と俱なり給ふ事を  
 御悟成被候は、神の他には醫師にすら信じ頼むの必要  
 もなく、又某の考ふる所に據れば神は直接に貴下を癒し

神と偕なる

書簡 第十一 九〇  
給ふべく候。其故に唯神にさへ倚頼みなされ候は、速に全快の結果を見るに至るべく候はんが、神に勝れる大なる信任を醫師に拂ふ場合には、却て快復の期の長引くものに御座候。

元來如何なる治療法を施し候とも、唯神の許し給ふ程度以上に結果あるものには無之、苦難若し神より出でたるものに候は、神のみ之を癒し得給ふは理の當然に御座候。往々神は靈の疾病を癒さん爲に肉體の疾病を下し給ふ事も有之候。依て靈肉双方の王たる此の醫師によりて自己を慰めなさるべく候。又神が貴下に與へ給ひたる

靈的生涯

其の境遇に満足なさるべく候。貴下若し某の境遇を幸福なりと思召しなされ候は、是れ大なる間違に御座候。神と俱に苦み、神と俱に悩む限は如何なる苦難も如何なる懊惱も某の爲には却て樂園なるべく、神と俱ならずして味ふものは如何なる娛樂も是れ某に取つては地獄と均しかるべく候。凡て某の慰籍とする所のものは神の爲に苦難を味ふ事に御座候。

某は遠からずして神の御許に參るべく候。此の生涯の間、某を慰め候ことは今や信仰(か)によりて神を視るの一事に御座候。而して今や信(ん)すると申(ら)さんよりも

親(た)しく視(み)るとでも言(い)べき程(ほど)に神(かみ)を視(み)申(まう)候(こう)。某(それがし)は信(しん)仰(かう)の教(を)ふる所(ところ)を眞(まこと)理(り)と認(み)め、此(こ)の確(かく)認(にん)と信(しん)仰(かう)の實(じつ)施(し)とに  
 より神(かみ)にありて生(い)き、神(かみ)にありて死(し)する所(ところ)存(ぞん)に候(こう)。貴(き)下(か)  
 も亦(また)絶(た)えず神(かみ)と俱(とも)にわれかしと祈(いのり)居(まう)申(まう)候(こう)、これ苦(な)難(なん)に  
 際(さい)し貴(き)下(か)の唯(ゆ)一(いつ)の助(たすけ)にして又(また)慰(なぐさ)籍(ま)となるべく候(こう)。某(それがし)は神(かみ)  
 が貴(き)下(か)と俱(とも)にゐるまさん事(こと)を祈(いの)る所(ところ)に御(ご)座(ざ)候(こう)。草(くさ)々(さ)。

書簡 第十二

吾(われ)儕(ら)よく神(かみ)の實(じつ)在(ざい)を覺(おぼ)ゆる事(こと)に慣(な)れ候(こう)はんに凡(すべ)て肉(にく)  
 體(たい)上(じやう)の疾(やま)病(びやう)は之(これ)によりて大(おほ)いに安(やす)らぎ可(まう)す申(まう)候(こう)。夫(そ)れ神(かみ)は吾(われ)

儕(ら)の靈(たま)魂(しゆ)を潔(きよ)くならしめ且(かつ)絶(た)えず神(かみ)と俱(とも)に在(あ)らしめんが  
 爲(ため)に苦(くる)難(なん)を與(あた)へ給(たま)ふ事(こと)往(ま)々(さ)有(あ)り之(これ)候(こう)。左(さ)れば心(こころ)を強(つよ)くして  
 怠(おこ)たず其(そ)の苦(くる)痛(しゆ)を神(かみ)に捧(たま)げ、之(これ)に堪(た)へ能(あた)ふ所(ところ)の力(ちから)を祈(いの)る  
 めらるべくお勸(すす)め申(まう)上(じやう)候(こう)。就(な)中(ちゆう)屢(りゆう)々(さ)神(かみ)と交(かう)通(つう)談(だん)話(わ)する習(な)づ  
 慣(な)を養(やし)ひ、出(で)來(き)得(え)るだけ神(かみ)を忘(わす)れぬやう心(こころ)がくる事(こと)大(たい)切(せつ)  
 の義(ぎ)にして、且(かつ)又(また)時(とき)々(さ)々(さ)其(そ)の身(み)を神(かみ)に献(さ)げ假(た)令(れい)苦(くる)痛(しゆ)の  
 中(なか)にありても神(かみ)の聖(み)旨(しゆう)に適(かな)ふやうにし、謙(けん)遜(そん)と愛(あい)とを以(もつ)  
 て(こ)子(こ)の親(おや)に於(お)けが如(ごと)く何(なに)事(こと)も神(かみ)に御(ご)求(もと)め可(まう)被(べい)成(せい)候(こう)。價(ね)値(ち)  
 もなきものには候(こう)へ共(ども)、某(それがし)も亦(また)祈(いの)禱(たう)を以(もつ)て貴(き)下(か)に御(ご)助(たす)  
 力(ちから)仕(つか)まづべく候(こう)。

神と借るな

神が吾儕を導き給ふに夥多の方法有之候。時としては神御自身を吾儕より隠し給ふ事有之候も、獨り信仰のみは必要に應じ吾儕の支柱ともなれば、又吾儕が神に對する信任の土臺とも相成申候。一體神は某を如何に所置し給ふ聖意なるや、そは某の知らざる所に候へ共、常に某は喜悅を以て溢れ居申候。世の人は苦惱み居候にも拘らず、嚴しき懲戒を受くべき苦なる某は餘剩ある大なる喜悅を絶えず感じ居申候。

貴下に代つて苦艱の幾分を某にも配ち給はん事を某は誠心より神に求め申候。然し某は心弱き者に候へば瞬時たりとも神に見棄てられるやうの事有之候ならば、最も不幸なる者たるべく候。然し如何で見棄て給ふなどの事可有之哉、吾儕先づ神を棄つるに非ざる以上は神は先んじて吾儕を見棄て給ふ御方には無之と確く信じ居候。唯恐るべきは吾儕却て神を離れ遠ざかる事にて、願はくは常に神と俱なりて神の聖前に生き、神の聖前に死する事こそ望ましき次第に候。某も貴下の爲に祈るべく貴下も亦某の爲に御祈り被下度候。稽首。

靈的生の涯

書簡 第十三 (前同人に宛てたるもの)

神と偕なる

貴下が斯く久しく苦艱に惱まされ候は實に見るに忍びぬ事とは申し乍ら、貴下の苦艱は却て神に愛せらるゝ證據と思へば某の心も大に安んじ申候。斯く觀じ候は、貴下も尙は容易に堪へらるべく存候。某の思ふ所によれば全く普通の治療法を棄て、全然神の御攝理に御一任なされ候方宜敷かるべく、神は貴下を癒さん爲に貴下が全く神に一任せん事を待給ふこと、愚考仕り候。從來種々様々に有らん限りの手を盡されしにも拘らず醫術は毫も効

靈的生涯

を奏せず、病症益々募られ候今日の場合なれば、一切を神の御手に任せ神より凡の事を懇求められ候とも、これ決して神を試みるわけには無御座と存候。某が前の書簡にも申上候通り神は時としては靈の疾病を癒さんが爲に、肉體の疾病を遣はし給ふ事往々有之候左れば心を安んじて神に任せ奉り、自己の苦艱を免かれん爲に祈らずして、却て神を愛する爲に聖意の存する所に堪忍ぶ力を求めらるべく候。斯様なる祈禱は人情の上より見れば爲し難き所に御座候へ共、神に嘉納られ且つ神を愛せんとする者には樂しき業に御座候。夫れ愛は苦

神と僭なる

艱も喜びてうけ、神を愛する者は喜悅と勇氣とを以て神  
 の爲に如何なる苦艱をも忍ぶべき筈に候、某は貴下が斯  
 くあらん事を切望すると同時に、凡て吾僭の疾病の唯一  
 なる名醫たる神によりて自己を慰められん事を御勸め申  
 上候。神は苦艱に惱める者を助けんと待構へ給ふ吾僭の  
 父にして、測知られぬ程に吾僭を愛し給ふ御方に御座候。  
 それ故只管神を愛して神ならざる他の者より慰藉を求め  
 られぬやう御心懸けなされ度候。某は貴下が直に此の勸  
 告を受納れて、一切神に任せられん事を切望して止まざ  
 る所に御座候。又不肖ながらも常に貴下の爲に祈るべく

吳々も常に吾僭の主と俱にあらん事を望み申候。再拜。

書簡 第十四 (前同人に宛てたるもの)

靈的生涯

某は主が貴下の御病氣を貴下の御希望通り幾分か息ら  
 しめ給ひし事を主に感謝致候。是迄某とて屢々死に瀕  
 せる事有之候ひしが、其の時ほど満足に思はれ候事は又  
 と無御座候。故に某は苦難を免れんがために決して祈ら  
 ず、勇氣と謙遜と愛を以て之に堪ふる力を唯祈求めたる  
 のみにて、實に神と俱なりて苦むは如何ばかり幸福の事  
 に候よ。貴下も亦如何に苦艱の大なるにせよ愛を以て之

神と借るな

を受けられ度候。夫れ神と俱に苦み、神と俱なるは恰も天國にあると等しきものにて、吾儕此の生涯の間に天國の喜樂を得んと思は、神に親しみて謙遜と愛とをもて對話する習慣に練達する事が肝要にて、如何なる場合にも、神より心を離らせぬ御心がけ專一に御座候。吾儕は自己の心を靈なる宮殿として茲にて絶えず神を崇め、又神の喜び給はざる事は常に之を語らず、行はず、念はざるやうに慎みて、心を専ら神の事のみを用ひ候は、苦艱の心は却て幸福と慰藉とに溢れ可申候。

某も此の状態に達するには最初頗る六ヶ敷思ひ申候。

靈的生涯

これ全く信仰によりて汚穢なく行はざるべからざるが爲にて、然し六ヶしければとて神の恩恵を以てすれば何事も出来ぬと云ふ理由なく、且つ熱心に追求むる者には神は拒み給ふ事なければ、飽迄も門を御叩きなさるべく候。左すれば神は好しと見給ふ時に門を開き給ふて、久しく賜はざりし所のものを直に授け給ふ事疑もなき次第に御座候。貴下よ願はくは全く神に委ねられよ、某も貴下の爲に常に祈禱を怠らざるべく候ゆる貴下も亦某の爲に御祈り被下度候。某は一時も速に神を見奉る事を望み居候。敬白。

書簡 第十五 (前同人宛)

神と偕なる

神は吾儕よりもなくてならぬものを克く知り給ふ御方に御座候へば、其の爲し給ふ所は凡てこれ吾儕の益となるものに候。吾儕若し如何ほど神の吾儕を愛し給ふかを知らんには、甘さも苦さも一様に差別なく喜びて受くるの覺悟なかるべからず、貴下も亦凡て神より出づるものは之を自己の喜樂になされ度候。最も堪へ艱さ苦難も善意を以てすれば決して堪へられぬものには無御座、よし神、手づから苦難を與へ給ふとも又如何なる懲戒を授け

靈的生涯

給ふとも、皆是れ愛に充ち給ふが故と思ひ候はゞ、其の苦艱も其の懲戒も均しく苦味を失ひて却て慰藉となるわけに候。貴下よ神を識る事を唯一の本分となさるべく、人は神を識(し)るに従ひて彌々益々識らんことを望むものにて、識(し)る事(と)は愛(い)する事(と)を測る尺度に候ゆゑ、吾儕識(し)る事(と)彌々深く彌々廣さに従ひて愛(い)は益々大になるわけに候。神を愛する事の深ければ深さはど苦艱の時にも悲嘆の時にも等しく神を愛し奉るべき筈に御座候。



神 と 借 な る

吾儕は又已往及び將來の恩惠の爲に神を愛すると云ふ事は餘り賞むべき事に無御座候。其の恩惠は如何に大なりとも矢張信仰によつて神に近よる事が肝心に候。故に信仰に由て神を御求めなされ度、神は吾儕の内にもまし給ふものなれば他の所に御求めなされまじく候。唯神のみを只管愛すればとて何の不都合のあらう筈もなく、却て神の喜び給はざる、又恐らくは神の怒を招くことと事、事に齷齪するは刑罰を受くべきものに候。これ瑣細(わづ)とは申せ他日大なる損害を來たす種子に御座候。且つ又熱心以て神に信頼し凡の事を自己より抛棄てな

靈 的 生 涯

され度御勤め申上候。蓋し吾儕の心は唯神の所有に御座候。貴下よ又此の恩惠を祈求められよ、乃ち吾儕各自の分に應じて爲し能ふ限を盡し候上は、日頃吾儕が懇願し奉るところの事に速に變へ給はらん事に候。某は神が貴下に恵み給ひたる疾病の息を感謝するに言なき程に候も、日ならずして某は御慈愛によりて神を見奉る事のできるやうにと、只管此の御恩惠を待望み居候。吾儕御互の爲に祈禱を捧げ可申候。草々頓首。

\* 編者曰く、其の後二日にしてローレンス教兄は病床に就き、其の週の中に永き眠に就かれた。

る な 借 と 神

神なると 靈的生涯終

明治三十九年四月七日印刷  
明治三十九年四月十日發行

譯者 ショエー、ハインド  
福岡縣小倉市東鍛冶町百七番地

發行者 ショーシ、プレスウエイト  
東京市赤坂區氷川町五番地

印刷者 久米川 治三郎  
東京市京橋區弓町二十四番地

印刷所 三協合資會社  
東京市京橋區弓町二十四番地

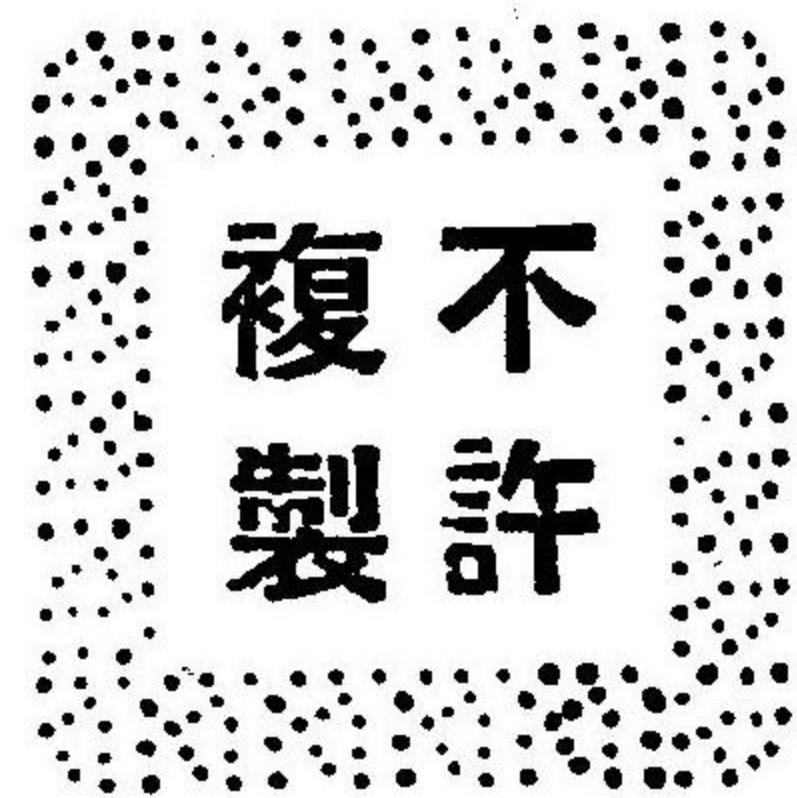
發行所

東京市麴町區有樂町二丁目三番地

基督教書類會社

← 奥

→ 附



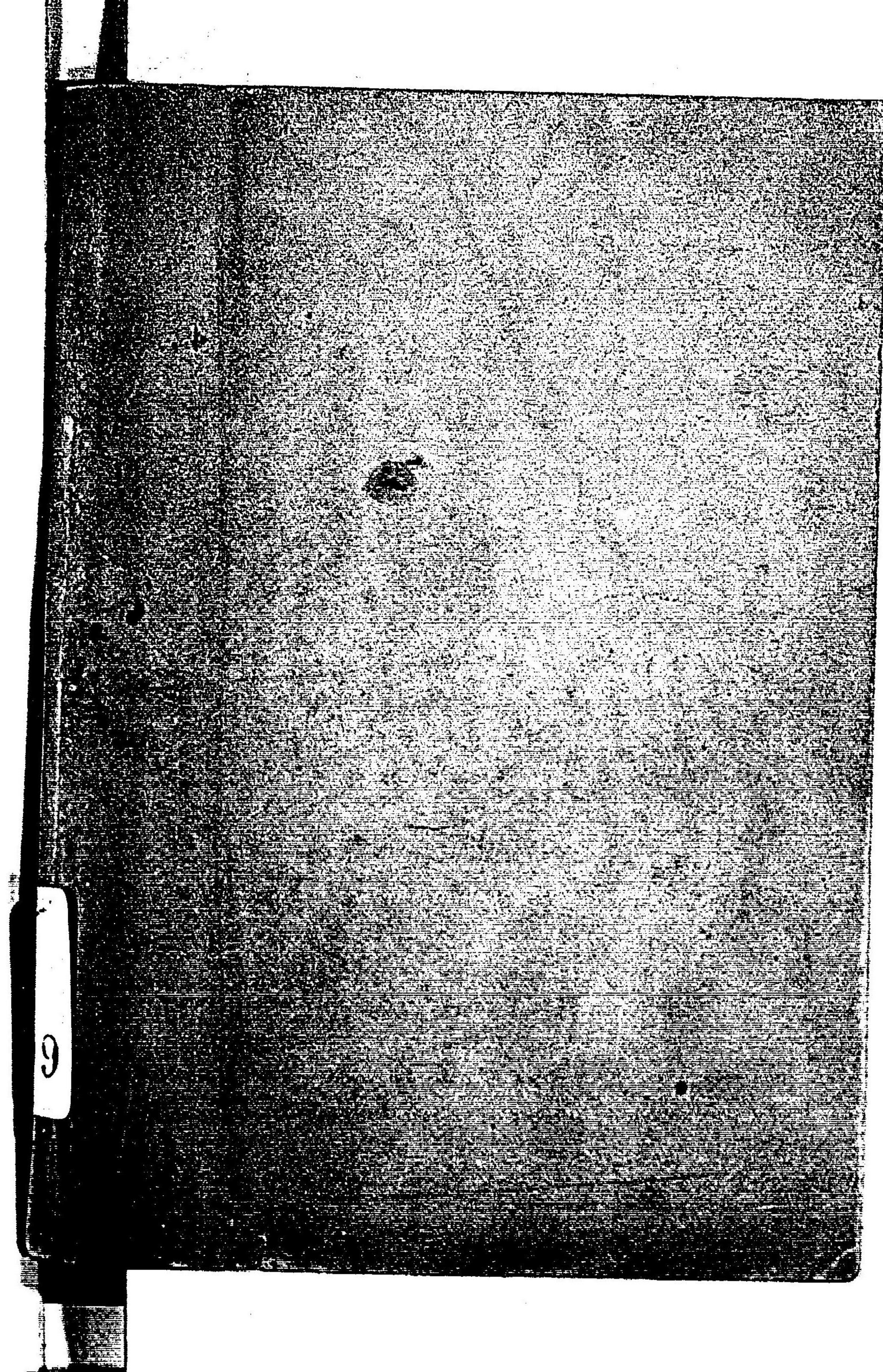
不許複製

告 廣

祈禱之學課 定價三十五錢 郵稅六錢  
 常の平安 同 八錢 同 二錢  
 祈禱法 同 五錢 同 二錢  
 力あゝる祈 同 十錢 同 四錢  
 イエスに従へ 同 六錢 同 二錢  
 角田先生 同 上製四十五錢 同 六錢  
 並製二十五錢 同 四錢  
 天路歷程 同 上製七十五錢 同 十錢  
 並製三十五錢 同 八錢  
 右之外基督教に關する内外書籍澤山取揃有之候間御注文  
 相仰度猶は目錄御入用に候へば御一報次第呈送仕候

東京市麹町區有樂  
 町二丁目三番地

基督教書類會社



9